

# 鶴林寺の三重塔

かくりんじのさんじゅうのとう



文化財愛護シンボルマーク

|       |                      |       |                       |
|-------|----------------------|-------|-----------------------|
| 名称    | 鶴林寺の三重塔              | 所在地   | 加古川市加古川町北在家 424 番地    |
| 別称    | 三重塔                  | 所有者   | 鶴林寺                   |
| 数量    | 1 基                  | 指定    | 兵庫県指定文化財              |
| 大きさ   | 高さ約 18 m 初層一辺 3.99 m | 指定分類  | 建造物                   |
| 構造・形式 | 木造、三間三重塔婆、本瓦葺        | 指定名称  | 鶴林寺三重塔                |
| 時代    | 室町時代                 | 指定年月日 | 昭和 45（1970）年 3 月 30 日 |



鶴林寺の三重塔

播磨を代表する古刹<sup>こさつ</sup>のひとつである鶴林寺は、「播磨の法隆寺」とも呼ばれており、揖保郡太子町の斑鳩寺とともに、古くから聖徳太子信仰を集める寺院として栄えてきました。境内には国宝の本堂や太子堂、重要文化財の銅造聖観音立像をはじめとする数多くの文化財が残っており、「仏教文化の宝庫」としても広く知られています。

仁王門を入れて左手に立つ三重塔は、通減率<sup>ていげんりつ</sup>(<sup>1</sup>)が大きく、全体的に均整のとれた美しい層塔です。

寺伝によると、養老2(718)年に武蔵国<sup>むさしのくに</sup>の大目身人部春則<sup>だいめしん ぶしん</sup>によって創建されたものと伝えられています。

しかし、現在の三重塔は、江戸時代の建築様式を基調としつつも、組物<sup>くみもの</sup>などに室町時代の建築様式がみられることや、瓦にも室町時代のものが認められることから、この塔は本堂などの大造営工事があった室町時代に造営され、文政2(1819)年に大修理が行われたものと考えられています。

初層の内部は、四天柱<sup>しよそう してんぼしら</sup>によって内陣<sup>ないじん</sup>と外陣<sup>げじん</sup>に分けられており、内陣には須弥壇<sup>しゆみだん</sup>を築き、壇上に金剛界大日如来坐像<sup>おりにあげこくみごうてんじよう</sup>を安置しています。また、天井は内陣が折上小組格天井<sup>おりにあげこくみごうてんじよう</sup>、外陣が小組格天井<sup>おりにあげこくみごうてんじよう</sup>となっています。

このほか、初層の板扉の内面には、江戸後期の修理の際の寄進者の名前などが墨書または彫刻されており、塔の歴史を物語るものとして注目されます。

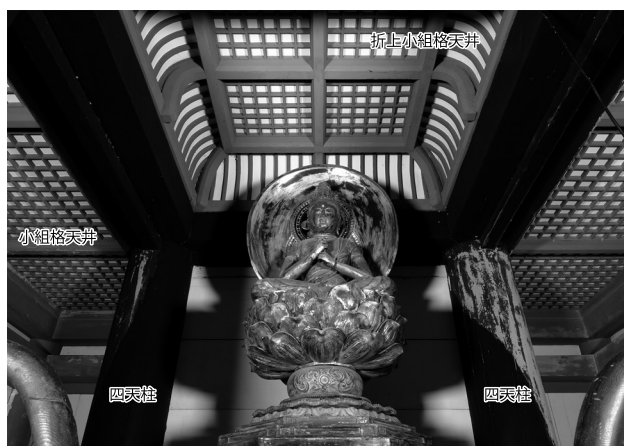
なお、この三重塔については、昭和22(1947)年に台風によって水煙<sup>すいえん</sup>が欠損したほか、昭和51(1976)年には火災によって内部の一部が焼失するなど数奇な運命をたどってきましたが、その都度修理が行われ、今に残っています。

このように、鶴林寺の三重塔はこれまでに幾度かの修理を経ているものの、中世の木造建築物として鶴林寺を構成する重要な文化財のひとつといえます。(文・写真/平尾)

- (1) 塔などにおいて、塔身や屋根の幅が上層にいくにつれて小さくなっていくことを通減といい、塔の一番下の階の初層に対する最上層の幅の割合を通減率<sup>1</sup>といいます。



初層の組物



塔内部の空間構成

●参考文献

- 『古寺巡礼 西国 4 鶴林寺』野口武彦・幹 覚盛、淡交社 (1981年)
- 『加古川市史 第7巻』加古川市 (1985年)
- 『鶴林寺 信仰の諸相』鶴林寺叢書4 法蔵館、鶴林寺 (2014年)

●キーワード

鶴林寺 三重塔 養老2年 武蔵国 大目身人部春則 文政2年 組物 初層 四天柱 内陣 外陣 須弥壇 金剛界大日如来坐像 折上小組格天井 小組格天井 板扉 墨書

●所在地 兵庫県加古川市加古川町北在家 424 番地

●交通 JR 神戸線「加古川」駅発かこバス別府ルート「鶴林寺」バス停から北へ徒歩1分。車の場合、加古川バイパス「加古川ランプ」から南へ約3km